

# 華北の廟会

——山東省を中心にして——

山根幸夫

中国商業史上において、定期市の占めた意義は相当大きかったといわねばならぬ。その点については、すでに多くの研究が発表されており、<sup>(1)</sup>私もさきに本誌に「明清時代華北の定期市について」という一文を発表した。<sup>(2)</sup>しかし、中国で一般に定期市とよばれるものは、いわゆる△旬市▽に相当し、西欧の△週市▽ Wochenmarkt に他ならない。西欧では週市の他に年一回または数回開催される定期市△年市▽ Jahrmakkt があつた。中国では年市に相当する定期市を廟会 Fair とよんだ。なお、西欧では年市の特別規模の大きなものを△大市▽ Messe とよんだ。中国では年市と大市とを特に区別する呼称は存在しない。

廟会に関する研究は、従来ほとんど行われていなかった。わずかに天野元之助「現代支那の市集と廟会」(東亜学二)<sup>(3)</sup>および斯波義信「宋代江南の村市と廟市」(東洋学報四四—一、二)が、その概容を解明しているにすぎない。本稿では、明末から清代において、華北の廟会がどのような経済的機能を果し、中国商業史上においてどのような地歩を占めていたか、について考察してみたい。

## 一

天野博士は、中国の年市を廟会という呼称で一括されたが、実は廟会<sup>(4)</sup>という名称は必ずしも一定したものではなく、各地でさまざまな呼称が使用された。たとえば、定期市を指す市・集などの語に対して、単に△会▽とよぶ場合もしばしばあった。また△山会<sup>(5)</sup>△山市<sup>(6)</sup>△会市<sup>(7)</sup>△神集<sup>(8)</sup>△神会<sup>(9)</sup>などとよぶ場合もあった。その他、△節場<sup>(10)</sup>△輪舗会<sup>(11)</sup>△廟市<sup>(12)</sup>△年市<sup>(13)</sup>などという呼称も行われた。

これらの呼称にほぼ共通することは、市・会・集に冠するに、廟・山・神などの語を以てしていることである。廟・山・神などの語がもつ意味は、廟会が宗教的祭礼に基づいて発生したものであることを示している。なお、節場という呼称は、やや語原を異にし、季節によって開かれる場市の意味であろう。以上のように、中国では年市を指す呼称はすこぶる多く、各地でさまざまなものであるが、一般には△会▽または△廟会▽という語が多く用いられているので、本稿では、以下すべて廟会とよぶことにしたい。

それでは、中国における廟会はいつごろ発生したものであろうか。一般に知られている最も古い例としては、唐宋の際、四川省の成都で春秋一回ずつ開かれた薬市、および正月、三月に開かれた蚕市<sup>(14)</sup>がある。成都の薬市・蚕市は、年市というよりも、むしろ大市というべき性質をもった市であった。薬市はいうまでもなく生薬の市で、全国各地で生産・消費される多量の薬材が、成都の薬市で集散した。蚕市は養蚕器具の市であるが、やはり華北、華中の集散市となっていた。その他、薬市の古い例として、加藤繁博士は河北省祁州の薬市をあげ、宋元時代以来、行われてきたものでなからうかと推定している。

この薬市は祁州南関の薬王廟で四月と十月とに開かれ、期間は春は二十日、冬は三十日に互り、近くは山陝、遠くは川広雲貴に及ぶ諸地方の薬商が其の地の生薬を携へて来り、北方各都市の売薬業者は待受けてこれを仕入れ、長江以北における薬材の供給は、主として此処で行はれたということである。<sup>(15)</sup>

右のように廟会の起原は、ほぼ定期市とその揆を一にしているが、宋元時代には廟会はまだそれほど普及しておら

ず、小商品生産が全国的に普遍化した明代中期以降になって発達したのではないかと考えられる。抑々、廟会の発生については、民国膠志卷五二、民社志、市集の条に、

市集以外に又、特別の山会あり。初め附近の首事の人等によって、曠地を指定し、期を択んで佈告し、商人を召致して、百貨を陳列す。毎年或いは一次、或いは二次、毎次或いは一、二日、或いは三、四日、会期内に交易繁盛す。

とあるように、最初その附近の有力者たちが中心になって、場所や日時を撰定して、市場商人によびかけて、廟会を開催するようになった。その場合、廟会を開く場所や時期が宗教的祭礼と密接な関係をもっていたことは言うまでもない。なお、廟会開設の首事者になったのは、その土地の紳士であったようである。道光武城県志卷一三、芸文志の「城隍廟会序」には、

余、茲の歳七月始めに斯の土に莅む。邑の紳士、戊寅の歳 嘉慶二三二月を以って城隍廟会を増立し、〔二月〕初二日より起り、初六日に止む。……道光元年辛巳十月。

とあるように、武城県の城隍廟会は同県の紳士たちによって開設されている。廟会の新設は、その地方の経済的发展にもかかわり、また住民の経済生活にも便する処があったから、このようにその地の有力者たる紳士によって開設されたのであろう。

まず、明代における華北の廟会に関する地方志の記述をあげてみよう。万曆萊州府志卷五、市集の条には、市集、郷集<sup>(16)</sup>とならべて、神集の所在をつぎのように掲げている。

掖 県 神集二

海廟 四月初八日

雙山 四月十八日

平度県 神集一

大豁口 二次 三月二十三日、十月初一日

昌邑県 神集一 青山 九月初九日

萊州府の中でも、濰県・膠県・高密県・即墨県には全然神集が開かれていないことは、注目すべきであろう。万曆安邱県志卷五、建置考、街市の条には、

山市、一に三山と曰い、県南二十里に在り。歳ごとに二市。市各々五日。三月朔、五月朔日より起る。

とあり、安邱県にも廟会一つがあったことを述べている。隆慶華州志卷四、建置志にも、市集の他に会のあることを述べ、

城隍廟 四月一日、八月二日

西南薬王廟 六月六日、十二月八日

東関東嶽廟 三月二十八日

小華嶽神祠 七月十五日

赤水紅廟 十月十日

華嶽下廟 八月八日

と記している。天啓同州志卷三、建置志、市集の条には、

在城 三月十八日、八月二日

羌白 三月二十五日、八月二十八日

坊頭 七月十五日

と記している。このように明代後半期になると、華北の各地では廟会が催されるようになったが、清代になると廟会の設置は一そう活潑になってくる。山東省萊州府の場合、乾隆萊州府志卷二、市集の条には、神会の分布をつぎのよう<sup>(18)</sup>に示している。

掖県 海廟会 四月、十月 雙山会 四月

平度<sup>(19)</sup> 大嶺口会 三月、九月 金錢山会 三月、九月 辛安廟会 四月、九月 金華山会 三月、九月

昌邑 青山会 九月

濰県 寒亭会 太公堂会 塔山会

膠州 なし

高密 なし

即墨 靈山会 四月、十月 馬山会 九月 玉皇廟会 四月、十月 火神廟会 五月

これを万暦年間のそれと比較してみた場合、掖県・昌邑県の廟会数には変化ないが、平度州では一から四に増加している。また廟会が全然存在しなかった濰県・即墨県も、それぞれ三、四の廟会が設けられている。なお、掖県の場合、乾隆二十三年に編修された掖県志<sup>(20)</sup>によれば、海廟・雙山の両会の他に、葉王会(四月)が新しく加わっている。さらに、道光平度州志卷九、建置志には、市集にして廟会をもつものとして、次の十一会をあげている。

白埠 三月、九月 中莊 三月、九月 故現 四月、十月 三埠 三月、九月

大成 四月 蓼蘭 三月、九月 魯家邱 正月、十一月 金錢 三月、九月

古県 四月、十月 徐里 四月、十月 祝溝 三月、九月

さらに、市集ではなく、廟会のみ開かれるものとして、次の各会を掲げている。

大豁口 三月、九月 金華山 三月、九月 神水 三月、九月 玉皇廟 四月、十月

五台山 七月 貧女台 正月

以上の市集を兼ねる廟会と、廟会独自のものを併せると、すべてで十七会となる。これは乾隆萊州府志にみえる四会に比べると、異常な増加ぶりである。市集を兼ねる廟会のうち、金錢(山)は康熙平度州志から見えるものである。市集にして廟会をも有するものがふえたことは、単に宗教的祭祀に係りて発生したというよりも、廟会のもつ経済的意義が認められた結果、各地の紳士たちにより、祭祀とはかわりなく、設立されたものではあるまいか。

次に、昌邑県について、乾隆昌邑県志<sup>(21)</sup>卷二、市集の条には、廟会として左のものを挙げている。

瓦城会 正月十四日、九月一日

南孟会 三月六日、八日、十月六日、八日

東塚会 三月廿五、廿七日、十月十五、十七日

塔児埠会 四月十二、十四日、九月十二、十四日

羊山会 十月十一、十三日

青郷会 四月八日

新郭会 四月十八日、十月十八、廿二日

密城会 十月十四日

上述の乾隆萊州府志によれば、昌邑県の廟会は青山会のみであったが、<sup>(22)</sup>此処では八会になっており、而も青山会は見当らない。なお、八会のうち半数は市集を兼ねるものである。乾隆七年当時、昌邑県でもこれだけ廟会が設立されていたことは、廟会增加の趨勢をはっきり示したものといえよう。

即墨県については、嘉慶即墨県志卷二、建置志、市廛の条には、神会として次の四会を挙げている。

靈山 四月、十月 馬山 三月、九月 玉皇廟 四月、十月 火神廟 五月

これは上述の乾隆萊州府志に見えた四会と一致するが、ただ馬山会の会期が従来九月のみであったのに対し、此処では三月の会期が加わっている。さらに、同治即墨県志卷二、建置志によれば、新しく石橋会が増設されて、併せて五会となっている。

以上、山東省萊州府下の各州県を例にとって、明末以降の廟会の発達を検討してみたが、各県によって程度の差こそあれ、廟会が逐次増設されてきたことは明確である。而も、その際従来のように宗教的祭礼と結びつけて廟会を設立するのではなく、それまで市集が開催されていた場所に廟会を添設する傾向がいちじるしくなってきた。このような廟会の増加ぶりを、最もはっきり示したものに、山東省曹州府の鄆城県の例がある。光緒鄆城縣志卷二、建置志、集会の条には、廟会<sup>(23)</sup>として四十一会を掲げている。市集も六十五集<sup>(24)</sup>あるが、集・会ともに多きに失するものといえよう。鄆城縣志では、これらの集・会を県の東西南北に区分して記述しているので、これを表示すれば左の如くにな

る。

計	城 北	城 南	城 西	城 東	
四一	一〇	一三	九	九会	廟 会
六五	一一	二八	一三	一三集	市 集
一二二	四	七	七	四会	廟会・市集を兼ねるもの
一九	六	六	二	五会	廟会のもの

右表によっても明らかのように、清末における鄆城県では廟会の過半数は市集と兼ねており、廟会のみものは四十一会中、十九会にすぎない。この事実、宗教的祭礼と結びついて発展した廟会の性格を、かなり変化させたものといわなければならぬ。

## 二

廟会は、その名称が示すとおり宗教的祭礼と関連して発生したものである。乾隆林県志卷五、風土志、賽会記に、

古は、社ありて以て万民を会す。近俗、香火会を為し、以て祈り以て報じ、以て神に敬事す。且つ因って以て集場を立て、商販を通じ、以て士女遊觀之樂を為す。

とあるように、宗教的祭礼（香火会）で多数の民衆がそこに集ってくる処から、その地の有力者たちによって集場

(廟会)が設立され、各地の商人を招いて、年市が催されるようになったのである。而もそれは単に経済的取引きの場にとどまらず、同時に民衆にとっては年に一度(または数度)の娯楽の場でもあったのである。同様の事情を伝えたものに、乾隆曲阜志卷三八、風俗志がある。すなわち、

春秋の佳日、他郡邑の岱・嶧に礼する者は老幼男婦、日ごとに千百人。……城闕廂隅の客店は〔彼等を〕容るる能わず。三月十日、上林の期には市集を設く。日に数万人、城より林に至るに、車轂人を撃ち、肩、衣冠を摩す。文物、一大都会なり。

とあるが、右の記事中に「三月十日、……市集を設く」というのは、いわゆる市集ではなく、廟会であり、このように宗教的祭礼で多数の民衆の集合するところに年市が設けられるようになったのである。

したがって、最初廟会の開設された場所は多く宗教的な場所であった。而も、宗教的といっても仏教的な祭礼と結びついたものは僅少で、大部分は道教——というよりも民間信仰的な祭礼に附随して発展した。それ故、廟会の開催場所は初め圧倒的に「廟」が多く、廟会という言葉が、中国の年市を代表する呼称ともなりえたのである。それは、どのような廟で、廟会が催されたのであろうか。勿論、それは各地の諸条件によっても規定されるであろうが、やはり最も多かったのは薬王廟および城隍廟であった。県城の廟会は、多く城隍廟で開かれる処から城隍廟会が多く、また廟会において薬材の取引きが重視された処から、薬王廟会も多かったものと考えられる。その他、玉皇廟、三官廟、火神廟、竜王廟、娘々廟、関帝廟、泰山廟など各種の廟で開催された。<sup>(25)</sup>勿論、仏寺で開かれた例も決してなかったわけではない。仏教的な廟会としては、比較的觀音廟、菩薩廟で開かれるものが多かったが、これらは純粹に仏教的というよりも、中国人の民俗信仰化したものといえよう。なお、天野博士は例外的な一例として、天主教の廟会(?)を挙げている。これは江蘇省松江の佘山にある有名な天主教堂で聖母月に附随して開催されたものである。<sup>(26)</sup>

しかし、廟会の発達とともに、次第に宗教的祭礼とはかわりなく、廟寺などの存在しない場所でも廟会が開催されるようになった。すなわち、廟会は初め宗教的意義の方が、商業的意義よりも重要性をもっていたが、廟会が発展するにつれて、漸次商業的意義の方が重くなり、逆に宗教的意義が軽くなる場合も生じた。その結果、宗教的祭礼と



はまったく関係なく、廟会が開かれる場合も生じた。宗教的色彩をもたない廟会は、主として従来定期市が開催されていた場所で開かれた。前節でみたように、山東省平度州では、道光年間（一八二一—五〇）十七廟会のうち、十一会は市集と兼ねており、同じく昌邑県では八廟会のうち半数の四会は、市集と兼ねており、鄆城県でも——清末のことではあるが——四十一廟会のうち、廿二会は市集と兼ねていた。勿論、これらの中には、廟会の開催地に市集が添設されたものもあったかも知れないが、大多数は市集に廟会が添設されたものであった。

一九三三年三月の江蘇省徐海十二県六十廟会の調査によれば、各廟会のもつ性質を次のように分類している。<sup>27)</sup>

大部分交易の性質を有する廟会	二五
香火と交易と併重の廟会	一六
大部分香火の性質を有する廟会	一二
大部分娯楽の性質を有する廟会	三
交易と娯楽と併重の廟会	三
香火と娯楽と併重の廟会	一

全体の四割以上を占める廟会が、純然たる商業的意義をもった廟会であり、僅かに二割が「大部分香火の性質を有する廟会」にとどまっていることは、廟会の発生当初における性格と、はっきり変化したことを示している。前述したように、廟会の約半数が市集と兼ねているという事実は、繰返し述べてきたように、廟会のもつ経済的意義が重くなつた結果に他ならない。

### 三

廟会が開催される回数は、大抵年一回または二回であるが、季節的にみた場合、多くは春秋二期に開かれている。

例えば、上述の山東省萊州府の場合、乾隆年間における廟会の会期は、春会は三、四、五月、秋会は九、十月に集中している。しかし、廟会の開催時期は必ずしもこのように一定したのではなく、かなり分散している場合もある。民国莒志卷二二、建置志下、市集の条には、次のような「莒県各鎮山会日期表」を掲げている。

東關鎮	四月七日	十月七日	
石井鎮	三月廿六日	六月廿一日	十月廿一日
招賢鎮	三月六日	九月廿六日	十二月廿一日
茅埠鎮	正月十九日	五月廿九日	九月九日
管帥鎮	八月廿九日	十一月十四日	十月廿九日
苑莊鎮	二月十八日	六月十八日	十月十八日
孟疇鎮	四月一日	十月一日	
井邱鎮	四月十九日	九月十六日	
汀水鎮	三月九日	十月廿四日	
許口鎮	三月廿五日	十月廿五日	
十字路鎮	四月六日	十一月一日	

右のように莒県では、ほとんど毎月何処かで廟会が開催されていることになる。これを表示すれば左の如くなる。

回数	月
1	正月
1	二月
4	三月
4	四月
1	五月
2	六月
0	七月
1	八月
3	九月
7	十月
2	十一月
1	十二月
26	計

七月のみは全然廟会がないが、それ以外の月には何処かで廟会がある。なお、本表によっても、春期は三、四月、秋期は九、十月に集中していることがわかる。上述の平度州（道光廿九）、昌邑県（乾隆七）、鄆城県（光緒十九）の各

廟会の会期を月別に表示すれば左のとおりである。

第 1 表

計	鄆城県	昌邑県	平度州	州 県
3	0	1	2	正月
10	10	0	0	二月
21	10	2	9	三月
16	8	3	5	四月
0	0	0	0	五月
0	0	0	0	六月
1	0	0	1	七月
0	0	0	0	八月
13	3	2	8	九月
19	9	5	5	十月
15	14	0	1	十一月
0	0	0	0	十二月
98	54 回	13 回	31 回	計
66	41 会	8 会	17 会	会数

年代のかなり隔たるものを羅列しても、無意味かも知れないが、廟会の開催時期の大体の傾向は、この表によってほぼ示されているといえるのではなからうか。民国になってからの山東省の廟会の会期を示したものに、山東省立民衆教育館編『山東廟会調査第一集』(一九三三)がある。これによって、山東省における開廟期を表示すれば次のようになる。

第 2 表

回数	月
10	正月
9	二月
15	三月
7	四月
2	五月
3	六月
0	七月
1	八月
4	九月
1	十月
4	十一月
4	十二月
60	計

第一表と第二表とを対比してみた場合、共通して言えることは、春会は二、三、四月に多いこと、五、六、七、八月は非常に少いことである。また、秋期に比して春期の方が廟会の多いことも共通点といえよう。異なる点としては、第二表では正月にも比較的多くなったこと、七月を除き毎月何処かで廟会が開かれていること、第一表に比して、秋期の廟会が非常に少いこと、などである。

以上の若干の例を通じて、開廟期について次のような諸点を指摘することができよう。開廟期は一般に春会は三、

四月、秋会は九、十月を中心に開催されること、春会の方が秋会よりも比較的多いこと、農繁期に相当する五、八月にはほとんど開会されないことである。なお、例外的な時期に開かれるのは、丁度その時期が宗教的祭礼と合致しているためではあるまいか。第二表で、正月および十二月の廟会がふえているのは、貨幣経済の農村に対する浸透、あるいは民衆の娯樂に対する要望などが、このような結果をもたらしたものと考えられる。

それでは、毎回の廟会の開催期間は何日くらいであったか。さきに引用した民国莒志の廟会はいずれも一日間のみとなっており、乾隆昌邑県志の廟会にも、一日間のみのものと然らざるものがある。民国膠志卷五二、民社志、市集の条には、

山会……每次或いは一、二日、或いは三、四日、等しからず。

とあり、また嘉慶禹城県志卷四、建置志、街市の条には、

期を定めて常に非ざる市あり、会と曰う。会、或いは三日、或いは五日。

とあり、道光東阿県志卷二、方域志、風俗の条には、

三月二十八日、東嶽大帝を祀り、天齊廟に演劇あり。遠近の香客、雲集し、商賈、因って以て市を為す。前後七、八日にして甫めて散ず。

十月十五日、三官廟に演劇あり。遠近の香客、雲集し、商賈、因って以て市を為す。百物、前後半月にして散ず。

とあるように、廟会の会期は、三、四日から七、八日、長くなると半月にわたる場合もあった。さらに、例外的には一カ月以上に及ぶ廟会もあった。<sup>(30)</sup>しかし、一般には廟会の会期は、三、四日から七、八日にわたるものが最も多かった。次に、天野博士の前掲書に載せられた河北省、および山東省の「各県における廟会状況表」<sup>(31)</sup>から、廟会の開催日数を表示すれば左のとおりになる。

河北省廟会日数表

廟会数	日数
15	一日
2	二日
2	三日
65	四日
1	五日
1	六日
0	七日
1	八日
10	十日
1	十五日
98	計

山東省廟会日数表

廟会数	日数
28	一日
0	二日
3	三日
4	四日
3	五日
7	六日
5	七日
5	八日
2	九日
1	十日
2	以上十五日
60	計

右の両表とも、一九三三―三六年の資料に基づいたものであるが、河北省では会期四日間のもの、六五%を占めている。これに対し、山東省では一日だけのものが四五%となっている。会期一日のものが多くなったのは、一つには交通機関の発達した結果とも考えられる。但し、会期一日の廟会は決して清末、あるいは民国になってから発生したものでなく、明代の廟会に会期一日のものが多かったことは、上述した万曆萊州府志、隆慶華州志、天啓同州志などの記述によっても明らかである。

廟会の会期の長短は、勿論祭礼の期間とも関連するであろうが、そこに集まってくる商人の数、取引きされる商品の量などによって規定されるものと考えられる。それ故、相当多数の商人が参会し、大規模な取引が行われる場合には、かなり長期間に及ぶ廟会も生れた。例えば、河南省輝県(百泉)の薬材大会(四月会ともよばれた)は、正式の会期は旧曆四月一日から十日までであったが、実際には前後一カ月余に及んだ。<sup>32)</sup> 山西省五台山では、毎年六月より八月まで二カ月間、大廟会が開かれ、山西・綏遠・察哈爾・寧夏・甘肅・新疆各省より多数の家畜が集まり、牛・馬・驢・騾・羊などの大家畜市が開かれた。<sup>33)</sup>

右の二例でも明らかのように、薬材あるいは家畜のような、特定の専門商品を扱う廟会では、そこに集まる商人数も多く、出陳される商品も多くなり、その経済圏は非常な広範囲に及んでいた。特に家畜市の如きは華北・西北の各省に及ぶ大規模なものであったから、その取引高が多くなり、会期が長びくのも当然であった。

#### 四

前述したように、廟会は年市であるから、旬市に相当する市集に比べて、その商業的規模がはるかに大きかったことは言うまでもない。道光平度州志卷九、建置志に、

民、貨市を以て聚まる者、小なるを市と曰い、大なるを会と曰う。

とあり、隆慶華州志卷四、建置志にも、

凡そ会には則ち商販の貨、市集よりも多し。

と述べている。このように廟会が市集よりも規模の大きかったのは、市集がその近隣の村落の農民のみを対象とし、且つ取扱われる商品も日用必需品にすぎなかったのに対し、廟会には、その州県の住民は勿論、近隣の州県をはじめ、大廟会になると周辺の各省からさえ客商が集まってきたからである。

まず、廟会で取扱われた商品の内容から考察してみよう。光緒文水県志卷三、民俗志には、

文邑、本と繁富の区に非ず、……殷実の戸は悉く隣邑と交易し、境内には商賈多なく、平居は一箕箒の微なるものも、従って購置する無し。惟だ廟会あれば則ち四方より齊集し、百貨雜陳せらるるを待む。民間日用の需、耕耨の具、皆な焉に取給す。既に商に便にして、亦た民に便なり。

とあるように、平素市集では箕や箒ひとつさえ容易に購入できないが、廟会になると、四方より商人が齊集し、百般の商品が陳列され、日用必需品はいうに及ばず、農器具でも何でも取扱われたので、農民たちは年に一、二度の廟会

で、これらの必需品をまとめて購入した。しかし、嘉慶禹城県志卷四、建置志、街市の条に、

亦た惟だ日用・農器・馬牛驢豕の属、多となす。

とあるように、百貨が陳列されたとはいっても、商品の大多数は日用品、農器具、家畜などの類であつたらしい。なお、光緒鄆城県志卷二、建置志、集会の条には、

春・秋・冬会は百貨俱に備わる。並びに牛馬木料あり。惟だ夏会には牛馬木料なく、祇だ麻布等の貨のみ。

とあり、同じ廟会といつても、春・秋・冬の廟会には百貨が出そろつたが、夏会には家畜や木料の出陳がなく、ただ麻布等の衣料が主であつたことを示している。このように、同じ廟会でも、会期によって出陳される商品の内容は、多少変化したようである。

大規模な廟会の一例として、金陵の年市をあげることができる。鍾山旧民枝翁手編の『歲華憶語』<sup>(35)</sup>には、

金陵の年市は、西は水西門より、南は聚宝門より迤邐数里、大功坊に集中す。皮貨の属は山西より来り、紙画・紅棗・柿餅の属は山東より来り、皆な黒廊大功坊一带に仮肆す。碧桃・紅梅・唐花の属は、花市街に集まり、橘・柚梨・梓鮮果の属は、水西門に集まる。鶏猪魚鴨醃臘の属は、聚宝門に集まる。錢を携えて市に入れば、各々欲する所を得て帰る。其の郷村の人、伴を結びて来り、捆載して以て去る者、肩相摩するなり。

とあり、南京の年市の盛大ぶりを如実に描きだしている。これは何時ごろの状況かわからないが、郷村の廟会に比して、その規模も大きく、陳列されている商品も遠隔の地から齎されたもので、内容もすこぶる豊富なものであつたとがわかる。一九二七年の調査<sup>(36)</sup>にかかる、河北省定県の北齊廟会(三月廿一―廿四日)では、次のような相当多種の商品が陳列された。

裝飾品……洋布を売る店80余、首飾を売る店30余、綢緞を売る店6、各種洋貨を売る店15、紙花を売る店6、竹細工の店2

農具……掃帚を売る店50、鉄器を売る店35、木貨を売る店多数(十畝以上の面積を占む)皮貨を売る店15、石頭を売る者10、糞叉を売る者10、風車を売る者3、竹籠を売る者5、筐子・籃子を売る者10、柳罐・葦箔を売る者

## 各7

食物類……河落麵を売る者12 饅子を売る者15 鍋餅を売る者7 各種の肉屋14 茶舗10 酒攤5 その他各種の

## 食物屋30

其の他……剃頭的20 算命的<sup>えきしや</sup>10 売芸的<sup>げいにん</sup>3 説書的5 觀西洋景的<sup>のぞきからくり</sup>6 売藥的8

以上の内容をみれば、廟会に出陳される商品の内容が如何に多岐多様にわたっていたか明白であろう。なお、北齊廟会では家畜類の取引きも盛んで、毎回取引きされる家畜（牛・馬・騾・驢）の頭数は二千を下らなかった。北齊廟会の開設場所は大體百五十畝前後の土地で、毎日参集する者はほぼ一万人に達し、それも定県の住民に限らず、周辺の祁州・深州・饒陽・博野・蠡県などからも多数の農民が参集した。

定県の例によっても明らかのように、廟会に出陳される主要な商品は、衣料・裝飾品・農具・食物類をはじめ、家畜木料などあらゆる種類に及んだ。その他、茶舗・酒店・床屋のようなサービス業や、易者・講釈師・大道芸人・覗きからくりのような娯楽的なものも集まった。廟会のこのような状況は、此処に集まった民衆が、単に必要な商品を購入するだけでなく、食物屋をあさったり、酒店へ入ったり、あるいは娯楽に打興するなどといったことも、重要な目的となっていたことを示している。民衆にとっては、廟会は年に一度か二度の貴重な娯楽の場であり、且つ多くは同時に祭礼の時期でもあったのである。

なお、演劇は廟会とはきり離せぬ行事で、廟会が開催される際には、その地の有志者が金を出しあって演劇を催した。これは恐らく神に奉納する意味もあったのであろう。例えば、さきに引用した道光東阿県志には「東嶽大帝を祀り、天齊廟に演劇あり」「三官廟に演劇あり」というように、廟会には必ず演劇がつき物であった。平素娯楽にめぐまれない農民は、廟会の演劇を唯一の楽しみとしていたであろうから、廟会で別に買物をする必要がなくとも、廟会に参集したに違いない。

このように、廟会は年に一回、または二回、農民が必要とする農具・衣料・日用品などをまとめて購入するという経済的意義の他に、唯一の娯楽の場所として、農民生活にとってかなり重要な位置を占めていたと考えられる。な



お、廟会で演劇とともに重要なのは賭博で、北齊廟会でも数年前までは非常に盛んであったが、一九二七年調査当時には、僅かに三、四の「庄宝的」が存在するにすぎなくなったと、李景漢氏は述べている。<sup>(37)</sup>

## 五

廟会は、市集とは異なり、その商業取引の規模も大きかったところから、其処に集ってくる商人も、市集の場合のように一県内に限られず、県外からも、また時によっては他省からも多数の商人が集まってきた。嘉慶涉県志卷二、建置志、市鎮の条には、

惟だ会市に逢えば、則ち他処の商賈、多く至る者あり。……客貨も頗る集まり、人衆く殷盛なり。

とあり、道光武城県志卷二、疆域城池志、街市鎮集の条にも、

集の外に会あり、四方の商民、此に輻輳し、集に視て物・陳肆も又た倍徒す。

とあるように、廟会には四方より多数の商人が来会し、したがって齊らされる商品(客貨)も種々様々であり、市集に比べてはるかに殷盛だったわけである。民国牟平県志卷五、政治志、実業・商業の条には、

城関集……毎歲廢曆五月二十三日より月底に至るまで、特別の会期と為し、商賈雲集し、百貨競賽す。数百里の外より来りて会に赴く者あり。名づけて州会となす。現に州を改めて県となすと雖も、<sup>(38)</sup>州会の名、旧に仍る。

とあり、民国になってからの廟会の状況ではあるが、その繁栄ぶりと、これに来会する商人の多かったことを示している。また、前述したように、五台山の家畜市や百泉の薬材大会の際には、客商の集まってくる半径は非常に長くなく、他省からも多数の商人が来会した。このように廟会が発達すれば、商人にとっては利潤を得る機会がそれだけ増大したが、逆に消費者たる農民の側からみれば、周辺に廟会の開設されるものが多くなると、消費もそれだけ多くなり、いろいろ弊害も生ずるようになった。民国荏平県志卷一、地理志、風俗の条には、「多会之陋俗」として、

会場の設けらるるや、商賈雲集し、物貨俱に備わり、有無を懋遷し、民に便たるなり。然れども〔会の〕少きを貴び、多きを貴ばず。少ければ則ち此を舍おきて他〔の会〕無く、会期一たび至れば、四方の人、争いて集まる。当に売るべき者は即ち売り、当に買うべき者は即ち買う。一会即ち畢れば、再び煩費せず。之を如何ぞ〔会〕多ければ、則ち買う者は多く觀望し、売る者も多く勞動す。商賈の獲る所、十会にして一会の多きに及ばず。土人の耗する所、一会には則ち一会の費あり。多数の繁乱を増さば、無形の損失を受く。市僧の徒、率ね起会を以て網利の具となし、益々多ければ益々善しとす。邑の南数十里の内、春より夏に徂ぶ二、三カ月の間、会场十五、六カ所を下らず。故に大会なく、交易盛んならずして、郷民の耗財、遊戲の荒業、男女の觀遊、弊、言うに勝るべからず。是れ取締りの責を有する者に望むある所なり。

と述べている。廟会の濫設といっても、右の荏平県の場合は、多少極端な例かも知れないが、兎に角廟会の發達によって、各地に次々と新しい廟会が設立され、荏平県のように一県で二、三カ月の間に十五、六カ所で開催される例も生じた。このように廟会が比較的近距离の場所で次々に開催されると、いずれも同程度の規模のものとなり、交易もそれほど活潑ではなくなった。その結果、廟会商人のあげ得る利潤も、相對的に減少し、郷民の方でもまた無駄な消費がふえ、且つ会期中は仕事を休むところから、農業がおろそかになるなど、いろいろの弊害が生じた。このような事態は、必ずしも荏平県に限ったことではなく、各地に共通した現象といえるのではないだろうか。

なお、右の引用文中に「土人の耗する所、一会には則ち一会の費あり」とあるが、廟会を開設するに当っては、その設備・運営費は地元民の負担であった。例えば、河北省定県の場合、廟会の会期が近づくと、村の役員たちが集まって、廟会の弁法を討論し、その相談がまとまると、住民の貧富・地畝の多少に応じて分担金をわりあて、廟会挙行の費用に充てた、と李景漢氏は述べている。<sup>(39)</sup>また、前述のように廟会の際には演劇がつきものであったから、住民の分担金の相当部分は、戯価や搭棚・搭台などの設備費に充てられた。

廟会の運営にあたって、市集の場合と同様、經紀・牙行などとよばれる仲介商人が、徵稅事務に関与したかどうかは明らかでない。右に引用した民国荏平県志に「市僧の徒、率ね起会を以て網利の具と為す」とあるから、廟会の交

易にあたって牙行が活躍したことは間違いないであろうが、どのような機構を通じて商税が科派されたかは不明である。ただ、万曆安丘県志卷五、建置考、街市の条には、

諸市、皆な官が較勘を為し、斛斗秤尺には又た牙役ありて之を分ち、集頭、以って之を総ぶ。山市には則ち県倅、親しく往きて治す。

とあるから、廟会の場合には普通県衙門から県倅（県丞・主簿・典史など）が監督官として派遣されて管理にあたり、また徴税を行なったものと考えられる。<sup>(40)</sup> 勿論、監督官がみずから徴税するのではなく、經紀などの協力によって運営したのであろう。

## 結 語

廟会の実態は以上に述べたようなものであったが、この廟会は日華事変の当時、なお旧態のまま残存し、農村における主要な原始市場を構成していた。しかし、廟会・市集といった交易機構は、交通機関の発達・農業生産の商品化・購入商品の増大などにより、次第に市集の開催日は頻繁となり、廟会も年一度あるいは二度の開催では、農民の需要に間にあわなくなった。当然、定着した店肆が増加するようになり、市集・廟会は従来の機能をそれだけ後退させることになった。しかし、廟会は上述したように、単に経済的な交易の場であるだけでなく、農民にとっては宗教的な場でもあり、唯一の娯楽の場でもあった。それ故、経済的に先進地帯であった江南地方でも廟会が依然として催された。経済的におくれた華北や西北・華南では、一そう盛んに廟会が挙行されたのも当然であった。<sup>(補註)</sup>

本稿では専ら廟会を農民の商品購入の場所として考察してきたが、実は廟会はまだ農民の農業生産品・家畜などの売却の場所でもあった。この点に関する考察にまで及ぶことができなかったことは、筆者としても甚だ遺憾である。

## 註

- (1) 明清時代の定期市を扱ったものには、加藤繁『清代における村鎮の定期市』（『支那經濟史考証』下巻所収）をはじめ、増井経夫「広東の墟市」（東亜論叢四）、倉持徳一郎「四川の場市」（日本大学史学会研究彙報一）、森田明「清代湖広地方における定期市について」（商経論叢五の一）、G. W. Skinner; Marketing and Social Structure in Rural China, parts I, II and III, *The Journal of Asian Studies* Vol. XXIV, No. 1, 2, 3 などがある。
- (2) 史論第八集、一九六〇年。
- (3) 本稿の大部分は、天野元之助『中国農業の諸問題』下（技報堂）の「農村の原始市場」の条に再録されている。
- (4) 廟会という呼称について、張次溪「清人竹枝詞中之燕都市場与廟会史料」（正風一の八）の中で、「北方則仮廟為定點、然廟之狹小者、多陳列於廟外、不限於廟中也。蓋鄉村之大家必有廟、故廟會為名」といい、その起原を説明している。
- (5) 山会という名称は、乾隆諸城縣志、民国萊陽縣志などに見える。
- (6) 山市という名称は、万曆安邱縣志、康熙平度州志などに見える。
- (7) 会市という呼称は、嘉慶涉縣志に見える。
- (8) 神集という呼称は、万曆萊州府志にみえる。
- (9) 神会という名称は、康熙招遠縣志、乾隆萊州府志、嘉慶即墨縣志などに見える。
- (10) 節場という呼称については、その出典を忘却してしまったが、季節によって開催される場市の意であろう。
- (11) 輪舗会という呼称は、乾隆陳州府志、乾隆西華縣志などに見える。
- (12) 廟市という呼称は、万曆野獲編卷二四、廟市、清稗類鈔卷四四、廟市の条などに見える。
- (13) 年市という呼称は、歲華憶語（『南京文獻』所収）に見える。
- (14) 事物紀原卷八、菓市、蚕市。この事実については、加藤繁「唐宋時代の市」（『支那經濟史考証』上巻、所収）三七—三七四に指摘されている。
- (15) 加藤繁『支那經濟史概説』第七章、商業、九三頁。
- (16) 万曆萊州府志が、市集・郷集と区別しているのは、同じ定期市でも県城などの都市で開催されるものと、郷村で開催されるものとを分けて考えているからである。
- (17) 天啓同州志によれば、「羌白・坊頭二鎮は雙日を以てす。然れども、皆な民間の衣食・器具のみ」とあるように、いずれも定期市の催されていた鎮で、雙日（偶数日）に市がたっていた。それ故、この両鎮の廟会が、宗教的祭礼とかかわりがあつたかどうかは疑問である。
- (18) 本書は乾隆五年、嚴有禧、張桐等の編修になる。
- (19) 康熙平度州志卷一、郷村志、市利の条には、すでに四廟会

(山市)の存在が記述されているから、平度州では康熙年間から四廟会が開催されていたことがわかる。

- (20) 乾隆掖県志卷一、市集の条に「神会三、海廟会四月十月、雙山会四月、葉王会四月」とある。

- (21) 本書は、乾隆七年周末邵等の編修にかかり、前述の乾隆萊州府志の編修におけること僅かに二年にすぎない。

- (22) 乾隆萊州府志には青山会のみで、その二年後に編修された昌邑県志には八会も挙げられ、而も青山会が見当たらないということは、萊州府志の記述の正確性を疑わせるものと考えられる。

- (23) 光緒鄆城県志では、廟会ではなく「貨会」という語が用いられている。

- (24) これらは郷村の集・会で、この他に県城の集・会もあった。光緒鄆城県志では「県市、四関輪流、以十日為度。四関廟、皆有貨会。三月三日北関会、三月二十八日東関会、五月十三日東門内会、九月九日西門会、臘月八日南関会」と述べているから、実際には集・会数はもっとふえるわけである。

- (25) 天野、前掲論文では、河北省の廟会について「城隍が最も多く(二五)、次いで娘娘(一一)、関帝(九)、葉王(七)、火神(六)、にして、他は夫々一、二にすぎず。一応河北省農民の信仰の状態も、これによって推することが出来よう」と述べている。

- (26) 天野『中国農業の諸問題』下、一一九―一二〇頁。沢村幸

夫『江浙風物誌』(一九三九年刊)に拠ったものである。

- (27) 天野、前掲書、一〇一頁。天野博士は、楊汝熊「徐海十二県廟会調査報告」(教育進路第二、三期)、および馮和法編『中国農村経済資料』に拠ったとされているが、後者には、この資料は見当たらない。

- (28) 天野、前掲書、一〇八頁。

- (29) 乾隆林県志卷五、風土志、集場記には「每年会场、大約多在三、四月間」とあり、会期が三、四月の間に多いことを指摘している。

- (30) 前述の江蘇省松江の余山にあった天主教堂の廟会は、前後一カ月間にわたって開催された。

- (31) 「河北省各県における廟会状況表」(天野、前掲書、一〇二―一〇四頁)「山東省十六県における廟会状況表」(同上、一〇五―一〇七頁)

- (32) 天野、前掲書、一〇八頁。

- (33) 右同、一〇八頁。

- (34) 山根、前掲論文。

- (35) 本書は『南京文献』中に収録されており、民国三、四年頃の著作ではないかと思われる。

- (36) 李景漢編『定県社会概況調査』四三七―四三九頁、参照。

- (37) 李景漢編、前掲書四三八頁。天野元之助氏も博興県胡家台の廟会について、「男達は男達で賭局にかけこみ、骰子・紅黑板子・揺会などで輸贏を争うのである」と述べている。天

野、前掲書一一七頁。

(38) 中華民国初めの地方行政区画の改革によって、省から直接県につながることであり、従来の州・庁・府などの行政区画はすべて廃止された。

(39) 李景漢編、前掲書四三六頁。なお、同書四四〇頁には北斉廟会の詳細な支出項目表（一九二七年）が掲げられている。

(40) 民国になってからは、県役所から科長または科員が派遣されたようである。天野、前掲書一一七頁。なお、博興県胡家台廟会では、治安の維持には表旗会があたり、七百人近いものが土槍・矛・刀・長纓槍をもって警備にあたった。

(41) 天野元之助氏の研究は、日華事変勃発前後の廟会について述べたもので、前掲書一二〇頁には「中国における市集・廟会の制度は、今日なお各地に広く残存し」ていることを指摘している。

### 【補註】

新中国になってからの市集や廟会の実態については、あまり明らかでないが、中国研究所編、一九六六年版『新中国年鑑』別冊便覧の「新用語解説」集市の条には、「一九六一年全中国の農村には約四万の定期市がひらかれ、農村における商品流通総額の約二五％が、この定期市を通じて取引されたと報じられている。」とあり、農村の社会主義化の進んだ今日なお「社会主義商業の重要な補充的役割を果している」ということである。